1876年フィラデルフィア万国博覧会の建築にみる「日本」

ON THE STUDY OF THE 'JAPANESE' ELEMENTS IN THE HISTORICAL CONTEXT
FROM THE ANALYSIS OF THE TWO JAPANESE BUILDINGS
AT THE CENTENNIAL EXHIBITION IN 1876

畑 智子*

Tomoko HATA

At the Centennial Exhibition in Philadelphia in 1876 Japanese carpenters built two buildings, Japanese Bazaar and Japanese Dwelling. Scrutinizing them from the historical context, it came to clear that the former was organized by the Japanese government with the intention of promoting export, and for it we can see the representation of 'traditional' Japanese elements.

It was one of the good examples of the Exhibition buildings for thinking about the representation of 'traditional' Japanese style or motifs in countries overseas.

Key words: International Exhibition, Policy of Promoting Industry, Philadelphia, Representation of 'Traditional' Style, early Meiji era
万国博覧会、殖産興業政策、フィラデルフィア、「伝統」の表出、明治初期、

序

19世紀の万国博覧会において日本人が建てた建築物についての研究は、すでにいくつか報告されている¹⁾。しかし1876(明治9)年米国のフィラデルフィアで行われた独立百年記念博覧会(以下フィラデルフィア博と記す)における日本人による建築物についての詳細な研究は管見のかぎり見られない²⁾。日本側の資料が少ないせい、その事実さえ充分に明らかにされていないようである³⁾。

しかし、本調査によって、フィラデルフィア博には日本人人工によって本格的な二棟の建物が建てられたことが確認された。一棟は日本政府によるJapanese Bazaar(売店)、もう一棟は金沢の河村幸の出資によるJapanese Dwelling(住宅家屋)である。本稿ではこれらの二棟の分析を通して、そこに見られる「日本的なもの」とその歴史的背景について考察したい。

また、この博覧会は、建築も含めて日本の文物が実質的にアメリカの人々の目に触れた最初の機会でもある⁴⁾。これ以後、アメリカにおいて擬日本様式の別荘建設も始まっており⁵⁾、日本の工芸品を扱うオークションも急速に増えている。アメリカで急速に広まる日本の影響を考えるなら、アメリカと日本との関係におけるこの博覧会の重要性はきわめて大きいと言えるだろう。

本稿は、日本の博覧会事務局による「米国博覧会報告書」⁶⁾、政府の公文書である「米国博覧会事務誌略」⁷⁾を中心に、アメリカの博覧会事務局による公式記録である「International Exhibition 1876 Official Catalogue」⁸⁾や公文書簡(フィラデルフィア市蔵)、日本政府による英文の出品物リスト「Official Catalogue of the

Japanese Section」⁹⁾、アメリカにおける数社の新聞記事などを参考資料とした。

1 博覧会参加の経緯

日本の新政府による初参加の万国博は1873年のウィーン博である。しかし準備の遅れで、開会の前年まで参加を表明することが出来なかったのに比べ、フィラデルフィア博への参加に関しては、すでに開会の3年前、1873年6月に日本政府はその意志をアメリカ側に伝えている¹⁰⁾。すなわち、フィラデルフィア博はウィーン博の経験を生かし、十分に準備期間を設けて、より積極的に政府が出品物の収集と展示に力を入れた成果が示されているといえる。博覧会開催までの経緯を簡単にまとめた¹¹⁾。

- 1871. 3. 3 アメリカの議会において、フィラデルフィアで独立百年記念の国際的博覧会を開く法案が採択。
- 1873. 6 アメリカ政府より日本に参加の勧誘があり、日本政府は直ちに承諾。
- 1873. 7. 3 アメリカ大統領が博覧会開催を宣言。
- 1874. 11 公式な日本参加がワシントンの日本領事館からアメリカ政府に伝えられる。
- 1875. 1. 博覧会事務局が、新たに内務省の分局である勧業寮に設置。
- 1875. 4. 博覧会事務局の総裁に内務卿大久保利通、翌月副総裁に陸軍中将西郷従道が任命される。
- 1875. 6. 12 博覧会事務局、関澤明清が在米事務のためアメリカへ

* 京都工芸繊維大学 大学院生

Graduate Student, Kyoto Institute of Technology

とともに¹⁵⁾、日本人の大工による二棟の建物を建設している。先にも触れたように、一棟は政府によるJapanese Bazaar(売店)であり、もう一棟は金沢の士族、河村幸¹⁶⁾の出品によるJapanese Dwelling(住宅家屋)¹⁷⁾である。

これらの建設経緯に触れておこう。1875年4月、すなわち博覧会の約1年前、日本政府はアメリカ政府に対し次の3点の要求を提出している。1. 日本の展示エリアを現在の7290フィートから11520フィート位に増やす 2. ディスプレイはすべて日本人の手によって行う 3. 展示品の販売の許可¹⁸⁾。

ここでは売店の建設は具体的に出ていないが、日本政府の最大関心事は、貿易振興にあり、博覧会での物品の販売は今後の貿易品の市場動向を知る上で最重要課題であった。前回の1873年ウィーン博、さらにその前の1867年パリ博においても売店の反響は大きかったことから¹⁹⁾、フィラデルフィア博でも売店建設は必須であったと思われる。在米公使代理、矢野二郎に代わって在米事務を引き継いだ博覧会事務官の関澤明清から届いた1875年7月18日付の電報には「博覧会の即売場の用に供する日本式建築の屋宇を造営すべき許可を得た」²⁰⁾とある。さらに8月27日付関澤からアメリカ政府への手紙²¹⁾には展示の準備をする人のための宿舎を建てるスペースを要求、9月1日には許可をもらったお礼の言葉²²⁾が述べられている。これらの手紙から、政府が積極的にこの二つの日本家屋の建設を進めていたことがわかる。

こうして9月にはアメリカ側の許可を得て、二棟の建設が決定した。ただし住宅建築の方は、金沢の河村幸の志願があった為、この建築は河村に任せられ、建築費用として五千円を政府が貸し付けることとなった²³⁾。

1875年11月26日、フィラデルフィア博へ向けての第一便が出航する。この太平洋郵船(Pacific Mail Steam Ship Company)アラスカ号には建築用木材、瓦、その他の職工用品387トンと事務官、事務官随行、職人たちが乗り込んでいた²⁴⁾。

フィラデルフィアに赴き、二つの建築造営(庭園も含む)に関わった人物を表-2に示した。

売店と住宅家屋の建設に携わった大工がそれぞれ異なっているが、これは先にも述べたとおり売店が政府による建設であるのに対し、住宅家屋が民間の出品人による建設であるからと思われる。後

表-2 渡米した建築関係者人名表

役職ほか	人名	出身	年齢	出航日	帰国日
事務官随行	松尾伊兵衛	東京	42才2ヶ月	1875.11.26	1876.7.23
同	宮城忠左衛門	東京	40才8ヶ月	1876.2.23	1877.1.24
売店掛 大工職	熊本半兵衛	東京	44才10ヶ月	1875.11.26	1876.7.23
同	関口善吉	千葉	37才10ヶ月	1875.11.26	1876.12.26
同	中野留吉	東京	40才11ヶ月	1875.11.26	1876.7.10
同	石井吉五郎	東京	42才	1875.11.26	1876.7.10
同	山下茂三郎	東京	33才7ヶ月	1875.11.26	1876.7.10
売店掛 瓦葺職	高木辰之助	東京	31才8ヶ月	1875.11.26	1876.7.10
旅店掛 大工職	山田孫三	石川	42才2ヶ月	1875.11.26	1877.1.23
同	関根大五郎	埼玉	45才5ヶ月	1875.11.26	1877.1.23
同	内山春次	新潟	23才5ヶ月	1875.11.26	1876.7.10
同	石黒元吉	新潟	24才	1875.11.26	1876.7.10
旅店掛 左官職	藤野音次郎	東京	26才11ヶ月	1875.11.26	1876.7.10

『米国費ラ特費府博覧会掛井出品人名表』より作成

者の担当の大工は北陸出身者が多いが、これは出品人、つまりは経済的スポンサーである河村幸が石川県の士族であることから当地の職人を集めた可能性が考えられる。

また、11月13日に事務官随行の拝命を受けた松尾伊兵衛²⁵⁾は、売店と住宅家屋の両方の建設に棟梁として携わった。もう一人の事務官随行、宮城忠左衛門は売店の横に付随する庭園を担当した。松尾と宮城の二人は3年前のウィーン博でも建築と庭園制作を行っている²⁶⁾。建築資材はすべて日本から運んだものを使い²⁷⁾、大工のほか瓦葺職人や左官職人も渡航している。数枚のイラストによる作業中の様子(図2～5)からも、伝統的日本の建築工法による造営であることが推察できる。

3 出品物としての建築

日本の出品物の分類は、主催国アメリカの政府からあらかじめ届いた、本館、アートギャラリー、機械館、農業館、園芸館の五館の展示分類項目に従っている。これによると本館はさらに3つの部門に分かれ、全部で7部門となっており、それぞれさらに細かい分類が分類番号をつけて行われている。(表1参照)

さて、ここで問題にしている売店と住宅家屋は、どちらも第3部の「Education and Science」(教育と科学)に分類されている。さらに細かい分類番号で示せば、第3部は300番台から始まっており、342に住宅家屋、343に売店がそれぞれ分類された。アメリカ側が規

図-2 作業風景

図-3 作業風景

図-4 作業風景

図-5 作業風景

図2～5 『Frank Leslie's Illustrated Historical Register of Centennial Exhibition 1876』

定した分類項目の内容は下記のとおり。また当時の翻訳も合わせて付した。

「Class 342 The dwelling. Sanitary conditions and regulations. Domestic architecture. -Dwellings characterized by cheapness, combined with the conditions essential to health and comfort. Fire-proof structures. Hotels, club-houses, etc. Public baths.」²⁹⁾

「342 居家、保安ノ形状及ヒ条例、鄙賤ノ住居、並ニ健全適快ノ形状、火ヲ防クヘキ築造、客舎、会宴所等、混屋」³⁰⁾

「Class 343 Commercial systems and appliances. Mercantile forms and methods, counting-houses and offices.」³¹⁾

「343 貿易ニ法式 及ヒ使用物、商売ノ体裁、方法...」³²⁾

要するに342では、住宅と住まい方、343では商売の方法、様子などにおいて、各国、各地域の特性を展示、公開することを目的としている。日本はこれに於いて、住宅家屋、売店という形式をとりながらもその建築意匠においては、日本を代表するものとしてふさわしいと当時の価値観において判断されたスタイルで表現したのである。

さて、これらは出品物であるから審査の対象となり、両者とも受賞している。住宅家屋に関しては受賞者は「松尾伊兵衛 日本事務官匠長」で、審査評には「木材ノ結構絶妙・・屋背及ヒ遊廊ノ配置幽雅ニシテ瓦葺モ亦善ク整列セリ彫刻ノ裝飾又美瞻ナリ」³³⁾ とある。

売店と庭園は博覧会後、アメリカ側の希望もあり政府へ贈与されるが、そのときの表明文に次のようなくだりがある。「元来右売店ノ義ハ畜物品売場ノ為而已ニアラス日本建築ノ巧妙ト園庭位置ノ風致トヲ縦覧ニ供スルノ趣意ニシテ即列品ノ一部ニ有之」³⁴⁾ つまり売店はただ売だけの場所ではなく、日本建築と庭園の巧妙さを見せることも主旨の一つである、と。さらにその建築の美しさはすでに新聞でも称賛され、出品物の売り上げにも貢献した、とある。

また、住宅家屋の利用状況等を調べてみると、次のことがわかった。まず、当初からここは渡航者の全員を収容するための宿泊所として意図されたわけではない。事務官用の宿泊所としては前年の準備段階で「フィラデルフィア市コロンビアアベニュー、北方パイラ町南42番丁ノ西」に煉瓦の建物をドビンス氏という人物に築造してもらい約束を取り付け、明治9年1月1日より12月30日まで19室借りることを決定している³⁵⁾。日本を代表する政府官僚は、日本の文明度の高さを示すためにも宿泊には西洋スタイルが望まれたのであろう。(図13)

さらに宿泊だけでなく、事務官のオフィスや外国人の接待にも利用されていたようである³⁶⁾。博覧会の会期中、外国人の急な接待に「売店適有ノ器物ヲ集メ飾付其外整頓シ本邦家屋ノ裝飾ヲ示」³⁷⁾した、とある。つまり売店から適切な器物を借りて、日本家屋の室内飾りの一例を示し、接待所としての役割も果たしたのである。

4 建築の形態

1876年早々から始まった日本人による建築作業は、アメリカ人にとって初めて見る珍しい光景であったため、新聞にたびたび掲載された。まず職人のための仮設の小屋が建てられ、2月12日には地業工事と思われる様子が、Frank Leslie's Illustrated Newspaper³⁸⁾

の挿画(図2)に見られる。この様子は一般紙だけでなく、建築の専門紙The American Architect and Building News³⁹⁾にも注目され、「最も奇妙な作業...20フィートの高さの三脚を据え、頂点に二つの滑車を付け、300ポンドの重さの円柱形の鉄の重りをロープで支えている」⁴⁰⁾と詳しく説明された。また、大工の使った道具や木組みに関して 詳細に紹介した記事も、Scientific American Supplement 誌(1876.3.11)に見られる。

住宅家屋の方は1876年4月初めに落成し、13日から一部が事務所として使われている⁴¹⁾。場所は西門近くのジョージヒルの西斜面。木造二階建て、コの字形で、84×44フィート、一階は板葺き屋根の出格子、二階には外側が回廊となり手すりが付けられている。屋根は寄せ棟で瓦が葺かれ、白漆喰で補強されている。一見すると町屋か旅籠風であり、玄関部にはやや反りのある千鳥破風の式台がついている。(図10.11)

前述の専門誌には「a most extraordinary structure」⁴²⁾(最も特異な構造)と評され、釘を使っていないこと、シャッターのように壁が動くこと(雨戸や襖、障子と思われる)、玄関のポーチ上部に木彫の鳥が浮き彫りではめ込まれていること(欄間の装飾か)、屋根はタイルのようなもので覆われていること、などが子細に述べられている。内部の様子については写真や描かれた資料が見つからないが、「奇妙なデザインの豪華なカーペットが敷かれ、壁からは植物の繊維で編んだ、光を遮り、風を通すカーテンが下がっている」⁴³⁾とある。この描写よりおそらく畳や簾が掛けられた室内と推定される。

また売店は、6月5日付公信において「売店建設落成ニ付本月10日開店」⁴⁴⁾とあるので開会の1ヶ月後、6月10日にオープンした。会場内の中央館と機械館の近く中央入り口付近に位置し、外観は木造平屋建て、コの字形の両翼が張り出し、入母屋造りの屋根、さらに軒唐破風による構えとなっている。(図6.7.8) 大きさは約125×40フィートで、内部は北向きに壁や建具を設置せず、棚と机とカウンターが置かれ、オープンなスペースとなっている。横には倉庫も付随している⁴⁵⁾。

庭園は売店の東面、南面に設けられた。庭園の造営についてはアメリカ側の強い要請もあった⁴⁶⁾が日本政府側としても前回のウィーン博の例もあって問題はなかったと思われる。配置図(図9)からみると正面に池があり、花壇のように区切られ、竹の籬でおおわれている。石の灯籠や銅製の鶴なども置かれていた⁴⁷⁾。

5 「日本」の演出

この二棟の建築にはいくつかの興味深い点が見られる。まず、住宅家屋の玄関に付けられた千鳥破風の式台、そして、売店の両翼の入母屋の屋根と軒唐破風である⁴⁸⁾。式台は、近世武家屋敷に始まり、後に貴族・寺家・町村役人さらに地主・豪商層などに広まる。つまり近世における社会的地位を、さらに近世末には経済的地位をも示す象徴であった。同様に唐破風ももともと寺社や武家屋敷に見られるものである。

国内における近代和風建築の類型化に関してはすでに研究が進められている⁴⁹⁾。その一例として初田亨氏は、伝統的建築に対する人々の関わり方の違いという視点から、1. 伝統的建築を継承することに価値をみとめつつ、その発展を試みた[伝統の維持、発展]、

図-6 Japanese Bazaar (売店) 『Centennial Portfolio』

図-7 南から見たJapanese Bazaar 『Frank Leslie's Illustrated Historical Register of Centennial Exhibition 1876』

図-8 東から見たJapanese Bazaar (Free Library蔵)

図-9 「米国貴府博覧会中 日本売店庭園略図」 『事務誌略』

2. 伝統的建築を構成する要素をばらばらに分解し、好みの要素のみを選ぶ傾向の見られる「要素の集積」3. 日本的なるものにこだわりながらもその生活様式や建築の構造には洋式化を取り入れ、新しい様式をつくりだそうとする「和風の構築」と分類し、さらに2「要素の集積」の中でもかつての社会的地位の象徴である唐破風のような要素を取り込んだものを「豪華さへの指向」としている。

海外における博覧会での日本建築をこの分類にあてはめるとしたらどうだろうか。フィラデルフィアの場合、建築資材のすべてを日本から運び込み、13人もの建築技術者が渡米していることから、あくまで伝統的工法と素材にこだわった「伝統の維持」の要素が強いことがわかる。しかし、それだけではなく、住宅家屋に式台をつけたり、物品を販売する建物に唐破風をつけるところなどに、「豪華さへの指向」が見られる。初田氏は「豪華さへの指向」は社会的

図-10 Japanese Dwelling (住宅家屋) 『Centennial Portfolio』

写真-11 Japanese Dwelling の玄関部 (Free Library蔵)

図-12 ウィーン博会場図『海外博覧会本邦参同史料』

地位を高めたいとする庶民や新興階級に多く建てられたとしている。博覧会においては外国において「日本」をアピールすべく、当時においてある程度格式の高いという認識のある建築意匠が部分的に付加されたのであろう。

明治9年といえは国内では盛んに洋風建築の導入・推進がはかられ、擬洋風建築も多数建設された時期である。海外の万博においてはあえて日本の伝統的工法と様式で「日本であること」を表現しようとしたのではない。そこに見られる意匠は、後のシカゴ博やそれ以後の博覧会建築のように、過去の建築物に範を求めるのではなく、江戸後期の価値観をひきついでいることがわかる。つまり明治初期の日本人が想定した「日本的なもの」をここにみることができる。

6 博覧会建築としての売店の意義

博覧会での二棟の建築のうち、政府が建造したのが売店の方であったことに注目したい。もちろん前述のように住宅家屋の方も建築費用を政府が貸し付け、建築作業も実質的には政府の雇った大工と

共に行っており⁹⁰⁾、政府の肝入れであることには間違いない。しかし、売店建設に政府は6038円19銭を支出しており、これは出品物の買い上げ金の 合計1万5886円83銭に比較して 大きな支出ともいえる⁹¹⁾。政府が直接建設と展示や運営に関わった建物を「日本館」とするなら、この博覧会において日本館は売店という事になる。なぜ政府はこれほどの支出をして、実際に事務所としても活用した住宅家屋ではなく、売店を建設したのか。

この問題を考えるうえで、先行する1873年のウィーン博につくられた売店に簡単に触れておきたい。この時政府はメーン館の陳列とは別に1300坪の日本庭園には入口に白木の鳥居、その正面奥に神社の社殿、脇に神楽堂が建てられ、鳥居から社殿までには2、3の売店が作られた。これは神祭りの社前の市になぞらえたところ⁹²⁾。図12によると提灯を吊り下げた左右二つの建物が売店と思われる。

この博覧会の出品物は手工芸品⁹³⁾が多くを占めていたが、これが政府の期待以上に好評を博し、売店で手工芸品の売れ行きもよかった。また、売店では最終日に影絵のパフォーマンスも行われ注目を集めた。すなわち売店は「日本的」雰囲気演出し、手工芸品の販売を促進する役割を果たしたのである。以後、政府は手工芸品を主に扱う商社、起立工商会社を設立し、重要輸出品の一つとしてその図案改良、制作、市場開拓などに力を注いでいく。さらに、博覧会后、建築物と庭園はイギリスの商社アレクサンドルパークの要請を受け、600ポンドで売却されてロンドンに移築された。つまり建築物そのものも販売の対象となったのである。ウィーン博の成果とこれにもとづく今後の政策方針は、博覧会副総裁佐野常民の34冊にわたる報告書によって克明にレポートされ、後の博覧会に大きな影響を与えた。

明治初期の日本は関税自主権の欠如を含む不平等条約や巨額の外国債務をかかえるなど深刻な国家財政状況にあった⁹⁴⁾。1873（明治6年）内務省の成立に伴い内務卿大久保利通は積極的な貿易振興政策を打ち出していく。しかし、当時日本は幕末までの鎖国により、民間による対外通商関係が欠如しており、貿易を担う民間の資本の蓄積がなかったため、政府が直輸出そのものを実質的に代行せざるをえなかった⁹⁵⁾。

このような政府主導の貿易振興策の柱になったのが博覧会であった。ウィーン博の博覧会事務所は、当初太政官正院におかれていたが、博覧会後は博物館と名称を変えて内務省の所管となり、フィラデルフィア博のそれは、内務省の中でも殖産興業政策の要となった勸業寮に置かれている。博覧会における売店が、政府にとって貿易のための市場調査としての重要な位置を占めていたことは明らかであろう。

ウィーン博では出品物の収集から買い上げ、運営に至るまですべて政府によるものであったが、フィラデルフィア博においては、政府の収集・買い上げによる出品とは別に民間の出品も行っている。もちろん河村の例でも見たように出品者には政府が資金を貸し付けており、展示場の他売店でも販売を行わせ、週ごとに収益金を計算して、貸付金の返済に充てるようにさせていた。

売店を直接博覧会事務所が建築・運営する例は、フィラデルフィア博以後見あたらない⁹⁶⁾が、おそらく民間の貿易商社がしだいに成長していく明治後期ころまでは何らかの形で政府が支援していたと思われる⁹⁷⁾。

7 館語

以上、国内外で行った資料調査をもとに、フィラデルフィア博における建築の分析によって以下のことが明らかになった。まず二棟の建築は、出品物として日本建築の様式で建てられたこと、またそれらは政府の直接または出資によって建設され、政府の意向が強く反映されていること。そこには武家屋敷や寺社の要素が見られること。さらにその形態は売店であっても、政府の貿易振興政策にもとづく重要な位置を占めていたことである。

博覧会における建築物は仮設的で特殊なものとみなされているせいか、建築史においてまだ十分に位置づけられていないように思われる。「博覧会の日本館はだいたいがちちである。..古い日本風に見えればそれで良いという姿勢すら見受けられる。」⁹⁸⁾とする見方もある。しかし少なくとも明治初期においては本論でみたように、赤字財政の中での膨大な支出や13人もの建築関係者が渡米した事実から、経済的にも人為的にも国家規模で最大の力を注いでいたことがわかる。

藤岡・深谷両氏⁹⁹⁾は、日本政府又は政府より運営を委託された民間団体による建物を「日本館」としたうえで、「茶室や売店などを除けば、明治26（1893）年より前には日本関係の建物は事実上建設されていない」とし、考察の対象として茶室や売店を含めていない。売店が「日本館」から除かれたのは、売店が博覧会の付随的存在で主たる建築ではないという現在の一般的通念が働いていたと思われる。しかしフィラデルフィア博における「売店」は政府主導によってつくられ、殖産興業政策を背景に「日本館」ともいえる重要な位置を占めていたことがわかる。

また、19世紀の博覧会が、各参加国による帝国主義を背景とした自国の工業と文化レベルの高さを誇示するステージであった¹⁰⁰⁾ことを考えるとき、博覧会場に建てられた建造物もまた、すべてが見られることを意識して作られた展示物であったといえるだろう。事実この二棟の建築物は、それぞれ物品販売や宿泊という機能を持ちながらも出品物として登録されている。すなわち両者は視覚の対象物として存在しているのであり、そのため政府に「日本的であること」を表現しようという意識が働いていたことがうかがえる。

建築における「日本的なもの」への意識はいつごろ生まれたのだろうか。明治末に我が国の建築様式の論議が盛んとなり、その中で「日本趣味」の語が多用される¹⁰¹⁾。しかし、建築に限らず美術、工芸等も含めてその意識はもう少し早いと思われる。これについては初田亨氏が1871（明治4）年から翌年にかけて建設された三井組の神戸の建築絵図面に見られる用語を通じて「日本的なもの」の意識を指摘している¹⁰²⁾。日本という国家のアイデンティティは、開国後西欧との接触によってその認識が促されたといえるが、この時期から、西欧に対しての「和風」「和様」が生まれたのであり、「日本的なもの」とは何か、という問いに直面したのである。

その最初の機会とは、海外における万国博覧会であった。「日本的なもの」の系譜を考えるうえで万国博覧会はひとつの事例として重要であることは、すでに触れた先行の研究でも明らかである。

さらに、19世紀から20世紀にかけてめまぐるしく変化した日本国内の情勢や国際関係を考えると、博覧会に現れる「日本的なもの」は変化しており、決して一様ではない。今後も各博覧会における日本の建築物や出品状況を、その政治・経済的背景をも含めてさらに

詳しく調査するとともに、それらの比較分析を通して「日本的」要素についての考察を重ねることを課題としたい。

謝辞

本論の資料調査にあたり、フィラデルフィア美術館の東アジア部キュレーターFelice Fisher博士、同館リサーチャー木下京子氏に多大なご協力をいただきました。ここに記して深謝申し上げます。

註

- 1) 藤岡洋保・深谷康生「戦前に海外で開かれた国際博覧会の日本館の和風意匠について」『日本建築学会計画系論文報告集』(1991.1), 三島雅博「1893年シカゴ万国博における鳳凰殿の建設経緯について」『同報告集』(1991.11)「鳳凰殿の形態とその成立要因について」『同報告集』(1992.4)「1900年パリ万国博における日本館の形態について」『同報告集』(1993.8), 坂本久子「アメリカ人がみたフィラデルフィア博覧会の日本館」『日本建築学会大会学術講演梗概集』(北海道1995.8)
- 2) 坂本氏の前掲講演には多少の資料が提示されている。
- 3) 藤岡・深谷氏の前掲論文の中でフィラデルフィア博の建造物の主催が「米国博覧会事務局」となっていたが、これは日本の博覧会事務局と民間であることが本調査で明らかになった。また、吉見俊哉氏は『博覧会の政治学』(中央公論社1992)の中で「旅館風の日本館と日本庭園のついた数寄屋風の建築」(p208)と述べているが本調査では数寄屋風建築は認められなかった。
- 4) 1876年以前アメリカにおいては1853年ニューヨーク、1871年サンフランシスコにおいて博覧会が開催されているが、いずれも小規模で日本からの参加もわずかししか認められない。
- 5) Clay Lancaster, 『The Japanese Influence in America』1983 (初版1963) p. 58 / ギンセント・スカー「『アメリカの建築とアーバンイズム (上)』香山寿夫訳、鹿島出版会 1973, p. 171
- マッキム、ミッド・アンド・ホワイトによるニューボートのカッノ (1879〜81)、ニュージャージー州のウィーター・ニューカム邸 (1880〜81) 等が例として挙げられる。
- 6) 1876-77年発行。第一〜五。以下『報告書』と記す。
- 7) 1873-1877(明治6〜10)年の記録。第一〜七と付録。「記録材料」所収。以下「事務誌略」と記す。
- 8) United States Centennial Commission発行 1876年
- 9) The Japanese Commission 発行 1876年, 1300部が現地で印刷された。
- 10) 『Official Catalogue of J. S.』 p.3
- 11) 「海外博覧会本邦参同史料」第1号. 1928年, 「事務誌略」, 『Official Catalogue』より作成
- 12) 「海外博覧会本邦参同史料」第1号, p. 85
- 13) 政府指導による図案に関しては近年、東京国立博物館においてその図案集『温知図録』が発見された。同博物館発行の調査研究報告書『温知図録』(1997.3)と『明治デザイン誕生』(国書刊行会, 1997.4)に詳しい。
- 14) 『Official Catalogue』
- 15) 日本側で第4部アートに分類したものは現地の都合で中央館に展示、第7部園芸は売店横に展示される。第5部機械は展示されたかどうか不明。結局日本は中央館と農業館の二館での展示が確認されている。
- 16) 石川県士族出身、詳細は不明。
- 17) 「事務誌略」ほか日本側の資料には、この建物は「旅舎」「旅館」「旅店」「日本家屋」等と称されているが、本論内では便宜上「住宅家屋」とした。
- 18) 当時の在米公使代理、二等書記官の矢野二郎からアメリカ政府へ宛てた公信 (Philadelphia City Archives 蔵)
- 19) ウィーン博に関しては「一日の売上澳貨2.3千ゴールデンに達し...扇・团扇の如きは一週日間に数千本を売尽せり」(海外博覧会本邦参同史料)とある。
- 20) 「事務誌略二」明治8年7月18日の項
- 21) 関澤明清からアメリカ政府への公信 (Philadelphia City Archives 蔵)
- 22) 21と同じ
- 23) 「事務誌略二」明治8年9月8日の項
- 24) 「事務誌略四」明治9年2月20日の項
- 25) 松尾伊兵衛以下職人たちの出自については未詳。松尾は農業館に晒竹を自費にて出品しており(『Official Catalogue of J. S.』これは原価380円で、実際には2233円49銭で売却されている。『報告書』第二「出品原価表」)
- 26) 田中芳男・平山成信編「澳国博覧会参同記要」1897年 p.37, 松尾と宮城はウィーン博においてそれぞれ建築術、園庭築造の技術伝習者のリストにも加わっている。(平山成信『昨夢録』大正14年 p.121)
- 27) 『報告書』第二「日本出品賞牌授附ノ辞令中審査官薦告ノ評語」 p.40
- 28) 『Official Catalogue』
- 29) 「費府博覧会分類略表」1876年

- 30) 『Official Catalogue』
- 31) 「費府博覧会分類略表」1876年
- 32) 『報告書』第二「日本出品賞牌授附ノ辞令中審査官薦告ノ評語」 p.35
- 33) 「事務誌略」明治9年11月8日の項
- 34) 「事務誌略二」明治8年9月6日の項。1ヶ月の家賃は1216ドル。
- 35) 「事務誌略二」明治8年9月6日の項
- 36) 「事務誌略二」明治9年7月1日の項
- 37) 19世紀半ば頃からニューヨークで発刊。フィラデルフィア博の際は会場内に事務所を設け博覧会の様子を細かく伝えた。その内容は1冊にまとめられ『Frank Leslie's Illustrated Historical Register of the Centennial Exhibition 1876』として1877年に出版。
- 38) 1876年1月1日にボストンで創刊。この年、フィラデルフィア博を機に多くの新聞、雑誌が創刊されたがそのうちの一つ。建築に対する関心の高まりをうかがうことができる。
- 39) 「The Japanese at the Centennial」1876年2月12日付。
- 40) 「事務誌略 付録」明治9年4月18日の項
- 41) The American Architect and Building News 「Japanese architecture」1876年4月22日付。
- 42) Thompson Westcott 『Centennial Portfolio』Philadelphia; Thomas Hunter Publisher, 1876 p.22
- 43) 「事務誌略五」明治9年7月22日の項
- 44) T. Westcott 前掲書 p.50 なお Tea House も付随していたと Clay Lancaster は述べているが、(「前掲書」p.48) 茶室の存在と形態は明らかではない。おそらく、数寄屋造りの茶室ではなく、単に日本の茶を供する場があったと推測される。
- 45) 「事務誌略二」明治8年7月25日の項には関澤から電信で、日本式住家及び売店には必ず遊園を造るという米側の規則に従って造営すべきとある。
- 46) 植物は以下の通り。[常青の樹木、灌木] 松各種、ヒバ各種、杉、茶樹、八角金盤、其他 [羊歯草類] 蕨、シノブ、薇、下草物類 [創見の植物] 蓮、水草、水苔 [園庭の器具] 各種栽花、盆花架等 [飾用練工] 竹製の藩籬、門扉、簾箔 [園庭作造] 園庭花壇、石及石灯籠の配置 (出品分類番号は、700〜733) (「海外博覧会本邦参同史料」 第一号 p.102)
- 47) 千島破風や唐破風に対するアメリカ人の反応として grotesque という表現も見られるが (T. Westcott, 前掲書 p.50)、このインパクトは大きかったようで、後に暖炉の装飾などのモチーフとして取り入れられている例もある。(ニューヨーク, Dr. E.H. William の日本の部屋/ C. Lancaster, 前掲書 p.55)
- 48) 初田亨「近代和風建築入門」村松貞次郎・近江栄編『近代和風建築』所収、鹿島出版会 1988年
- 49) 2章で両建築の担当の大工は、リスト上において別々に名前が載っているとしたが、作業風景のイラストや竣工時期のずれから実際に共同で作業したと考えられる。
- 50) 「米国博覧会事務局経費出納表」発行年不明 1877年頃か。この資料によると、派出費27万5376円36銭と採集費10万円を合わせた計37万5376円36銭が支出費、これに対し計26万5410円69銭7厘が収入となっている。
- 51) 「海外博覧会本邦参同史料」第一号 p.44-45, なお井上章一氏は「日本館のエキゾチシズム」(『図説万国博覧会史1851-1942』吉田光邦編, 思文閣出版1985)の中で「数寄屋風の茶室」としているが、筆者が調べた資料からはその存在は認められなかった。
- 52) 横溝広子「ウィーン万国博覧会出品目録草稿」『美術研究』357号, 1994
- 53) 拙稿「明治期の工芸品をめぐる輸出振興政策について」『質文化研究』第5号, 1997
- 54) 大久保利通は明治7年「殖産興業に関する建議書」の中で政府主導による殖産興業の推進を表明。また、明治8年大隈重信とともに「輸出品ヲ以テ外債償却ノ儀ニ付伺」の中で内務省勸業寮において積極的に政府貿易の推進を図り、外債に充てるべきだとしている。
- 55) 藤岡・深谷, 前掲論文 p.102-103
- 56) 例えば明治11年パリ博では売店を起立工商会社为建设・運営しているが同社は政府が多大な出資をしている半官半民の会社である。
- 57) 井上, 前掲書
- 58) 藤岡・深谷, 前掲論文
- 59) 吉見, 前掲書
- 60) 川道麟太郎・橋寺知子「明治期における「日本趣味」という用語について」『日本建築学会計画系論文報告集』(1992.2), 藤岡洋保「明治・大正期の日本の建築界における「日本的なもの」」『日本建築学会大会学術講演梗概集』(近畿 昭和62.10)
- 61) 初田亨「近代和風建築 序文」初田亨・大川三雄・藤谷陽悦著『近代和風建築一伝統を超えた世界』建築知識, 1992 / 拙稿「明治10年代の輸出工芸品にみる日本イメージの創出」『デザイン理論』35, 1996. この研究において少なくとも明治10年代前半には既に美術工芸品に日本的イメージを付して輸出しようとする政府の意図を明らかにした。

* 原資料の引用においては旧字は新字に改めた。また英文資料からの翻訳は筆者による。

(1997年5月10日原稿受理, 1997年9月5日採用決定)